

【Visual Evidence】

ストレートネックが治った。同時に多数の不定愁訴が消えた

松井 孝嘉^{*1} 北條俊太郎^{*1} 設楽 信行^{*1}
作田 学^{*2} 藤井 弘毅^{*3} 高倉 公朋^{*1}

Treatment Method for Neck-muscle Disorders with “Straight Neck” That Eliminated
Many Associated Indefinite Complaints

Takayoshi Matsui^{*1}, Shuntaro Hojo^{*1}, Nobuyuki Shitara^{*1}, Manabu Sakuta^{*2},
Hiroki Fujii^{*3}, and Kintomo Takakura^{*1}

Department of ^{*1}Neurosurgery, ^{*2}Neurology and ^{*3}Radiology, Tokyo Neuro Center, Tokyo, Japan,
Department of ^{*4}Neurosurgery and ^{*5}Radiology, Japan Neurological Institute, Matsui Hospital, Kagawa, Japan

(Received December 28, 2015)

(Accepted April 28, 2016)

Summary: Many cases of spinal disease with a “straight neck” present with various indefinite complaints of general malaise and are difficult to treat. We recognized in 1978 during the study on whiplash-associated disorders that disorders of neck muscles were causing indefinite complaints related to the symptoms of autonomic imbalance. We developed a treatment method for neck-muscle disorders in 2005, and we report cases where low-frequency treatment of neck muscles led to the cure of straight necks and elimination of many subsequent indefinite complaints. The straight neck is diagnosed on a lateral radiograph in an up-neutral position. Since 1978, we have been using the term “straight sign” for cases in which necks appear straight on lateral radiographs in flexion.

Key Words: Indefinite complaints, Straight neck, Straight sign, Computed radiography, Depression by autonomic imbalance

使用機種: RADIOTEX (島津製作所), Computed Radiography Speedia CS (富士フィルムメディカル)

はじめに

ストレートネックは、数多くの不定愁訴を伴っている症例が多く、東京脳神経センター (TNC) を受診する症例のほとんどは、整形外科を受診していた。ストレートネックになると多発している愁訴は、治療しても治せない整形外科医に言われて治療を打ち切られている。我々はストレートネックが治癒し、同時に数多く出していた不定愁訴が

消えた例を経験したので報告する。

症 例

21歳、男性。

2年前より頸部痛が始まり、数多くの不定愁訴が出現するようになった。初診時、頭痛、頸部痛、肩こり、フラツキ感、吐気、食欲不振、不眠、体温調節障害、発汗過多、心悸亢進、霧視、目が疲れやすい、ドライマウス、原因不明の微熱が出る、全身倦怠、気圧が下がると症状が強くなる、手足の冷え、など多数の身体症状の他に、意欲がない、何もする気になれない、気が滅入る、気分が落ち込む、集中力がない、理由のない不安感、根気がないなどの精神症

^{*1}東京脳神経センター 脳神経外科 【連絡先：〒105-0001 東京都港区虎ノ門4-1-17】、^{*2}同 神経内科、^{*3}同 放射線科、^{*4}日本脳神経研究所・松井病院 脳神経外科、^{*5}同 放射線科

VISUAL EVIDENCE



Fig. 1 Before neck therapy. A straight neck was diagnosed from a chest radiograph (CR) before treatment of the neck muscles.



Fig. 2 After neck therapy. A straight neck shows improvement and a normal curve on the chest radiograph (CR) after treatment of the neck muscles.

VISUAL EVIDENCE

状が見られた。頭部外傷やムチウチなど既往歴は特記すべきことなし。血液生化学など、ルーティン検査にも特記すべきことなし。

頸筋の異常は現在のところ、どのような画像診断法を用いても、明確に描出できないので、**Fig. 3**に示すような頸部

の36ヶ所のチェックポイントを触診による圧痛と硬化所見で診断している。この症例では、頸筋のチェックポイント36ヶ所全てに異常が見られて、頸部X線側画像でストレートネックが見られた(**Fig. 1**)。ここで異常と判定された部位に毎日、次の治療を行った。1回10分、1日2回行っ

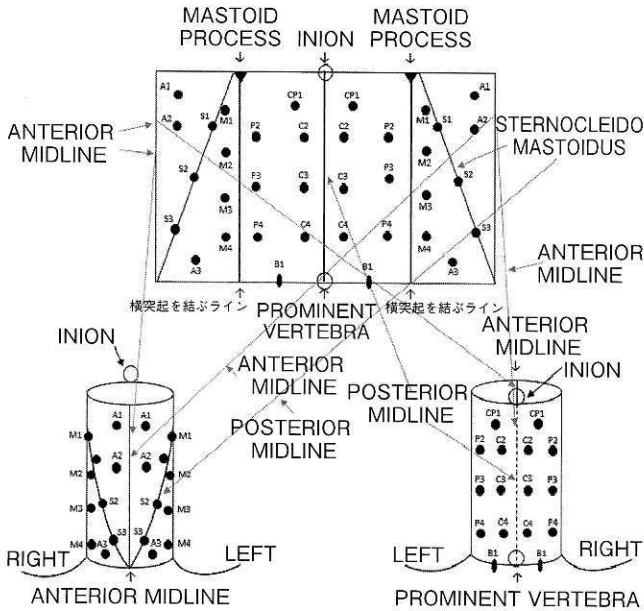


Fig. 3 Palpation checkpoint of neck muscle. Thirty-six checkpoints of a neck muscle were palpated, and an indurating view led to a diagnosis of pressure pain.

た。

1. 特殊な低周波治療器 2 種類を使用。

①SSP は(株)日本メディックス社製 低周波治療器 トリミックスリノス TM-5502

②トプラーはセルコム(株)社製 W.E.S. 低周波治療器 TopraLCA-204

2. 遠赤外線:(株)日本メディックス社製 赤外線治療器 セラピア 3300 を使用。

3. 鍼治療:理研医療電機(株)社製 低周波鍼通電装置 ノーベルパルス RP-4 を使用。

毎週、症状が 2~4 症状ずつ消失していき、8 週目には目が疲れやすい、根気がないという 2 症状を残して全ての症状が消失した。他覚的にも頸筋の異常が消失したので退院となった。退院時、頸部 X 線側面像では、生理的湾曲が出現した(Fig. 2)。ストレートネックは正式な医学用語ではないが、国民誰もが知っているほど使用されている。

Discussion

数多くの不定愁訴を呈し、治療困難な症例の中に頸部 X 線の側面像でストレートネックの所見を持つものが多い。当センターでは、不定愁訴の症例を専門的に診療しているので、全国の重症例が集まっている。

当センター受診前に、数多くの医療機関を受診して、ストレートネックの所見があるから、これ以上治療ができないという判定をされて、治療を打ち切られている。特に整

形外科に多い。このような現象は、益々増加している。しかし、この判定基準は誤りがあることがわかった。

我々が 30 年以上かけて開発した新しい治療により、不定愁訴が消失し、その中にはストレートネックも治癒した例があるので報告した。

今回、症例報告した例のように、頸筋の治療によりストレートネックが消失する症例はまだ出始めたところである。しかし、X 線像上、ストレートネックが消失しなくても、他覚的に触診上、頸筋の異常である圧痛と硬化所見が消失すると、不定愁訴の数多くの症状、夫々について約 90% の症例で消失している。この不定愁訴は自律神経失調の症状である¹⁾²⁾⁵⁾。不定愁訴は頸筋の異常で起こり³⁾⁴⁾⁶⁾、常に副交感神経が劣位の自律神経失調である⁷⁾。

頸筋が原因で起きる不定愁訴は、眼科、耳鼻咽喉科、循環器科、整形外科、消化器科、脳神経外科、神経内科、精神科など多岐にわたる症状が出る。どの診療科を受診しても、専門が分化しているので、受診した科の症状を軽くする対症療法の薬剤を投与するだけで根本的な治療ができない。結局、治せない難病になっているのが現状であり、毎年 10 兆円以上(国家予算全体の 10%)の医療費が無駄使いされている。

ストレートネックという言葉は頸部 X 線側面画像の正中位に使われているが、我々は前屈位で見られる頸椎の直線化現象に対してストレートサインという言葉を用いて 1978 年以来使用している。前屈位のストレートサインは、頸筋の疲労、損傷によって頸部後筋群が機能不全に陥った結果と考えている。ストレートネックも同じメカニズムの可能性はあるが、今のところ結論を出すに至っていない。また、ストレートネックが消失して不定愁訴が同時に解消した例は、この報告例以外にも次々出現している。

まとめ

①ストレートネックが、頸筋に対する物理療法で消失する可能性があることを報告する。

②ストレートネックと不定愁訴が密接な関係にあり、ストレートネックの消失と共に、不定愁訴も消失することがわかった。

③ストレートネックという言葉は頸部 X 線側面画像の正中位での所見で使用されている。前屈位での直線化現象は頸部後筋群が疲労、損傷によって機能不全に陥った結果と考えられ、我々はストレートサインという用語を使用した。

文 献

1) 松井孝嘉, 北條俊太郎, 作田 学, 他: 自律神経失調症の原因(頚性神経筋症候群)とその治療法—最近急

増している新型うつは頸筋が原因の自律神経失調から発生する器質的疾患であり、完治可能である—。自律神経 46: 267-276, 2009

- 2) 松井孝嘉：自律神経失調は頸筋の異常で起きる—頸筋の治療で自律神経失調症が治る—頸性神経筋症候群（略して頸筋症候群）。神経内科 72: 35-46, 2010
- 3) 松井孝嘉：頸性神経筋症候群。Smart nurse, メディカ出版, 東京, 2010, 736-737
- 4) Matsui T, and Fujimoto T: Treatment for Depression with Chronic Neck Pain Completely Cured in 94.2% of Patients Following Neck Muscle Treatment. Neuroscience and medicine 2: 71-77, 2011
- 5) Matsui T, Ii K, Hojo S, et al: Cervical Neuro-Muscular Syndrome: Discovery of a New Disease Group Caused by Abnormalities in the Cervical Muscles. Neurologia medico-chirurgica 52: 75-80, 2012
- 6) Matsui T, Fujimoto T, Endo Y, et al: Neck neuromuscular treatment for depressive disorders with cervical muscular tension or chronic neck pain—A pilot study. Open journal of Psychiatry 2: 61-67, 2012
- 7) 松井孝嘉：新型うつと不定愁訴の新治療法完成—頸性神経筋症候群と自律神経失調症—。BRAIN MEDICAL 編集部（編），BRAIN MEDICAL，メディカルレビュー社，東京，2012-2013, 63-72

<要 約>

ストレートネックの症例は、数多くの治療困難な不定愁訴を有するものが多い。1978年ムチウチの研究で、Neck muscleの異常が不定愁訴を起こすことに気付いた。不定愁訴は自律神経失調の症状であった。2005年にNeck muscleの異常の治療法を開発した。Neck muscleの治療によりストレートネックが治り、数多くの不定愁訴が消えた症例を経験したので報告する。ストレートネックはX線側面像の正中位で使われている。我々は1978年以来、前屈位での直線化現象がみられる症例にストレートサインという用語を使っている。

Comments

松井孝嘉先生開発の頸部治療法は、我々の病院でも行っている。この治療法は、これまで病院を転々としても難治性であった、自律神経障害や抑うつ障害を伴う頸部痛あるいは頸部のこりなどの症状を示す人々に顕著な効果を示している。頸部治療の効果は、松井のこれまでの論文にある通りである。

しかし、なぜ頸部治療がこのような効果を示すのか、まだ理論的裏づけがなされていない。医学的発見は一般に新

しい臨床的事実が先行し、続いて理論的構築がなされるが、現在は臨床的事実が先行している状況である。少なくとも理論的にはっきりしている事実は、抑うつ状態や頸部の痛みやこりが自律神経機能と密接な関係があることである。おそらく、頸部の筋肉が硬直するなどが原因で、頸部を走行する副交感神経の圧迫によって、副交感神経の機能異常が起こるのであろう。しかし、副交感神経の機能障害ばかりではなく、交感神経機能がどのように関与しているのか、慎重な検討が必要である。

また、精神医学的にも、抑うつ状態やうつ病はほとんどが「自律神経機能の明確な変化」を伴っている。全身倦怠や易疲労などの不定愁訴は、精神障害だけでは説明できない。おそらく、頸筋の緊張異常による自律神経障害に起因する各器官の調整不良の集積が関係しているようである。また一方、頸性神経筋症候群における抑うつ状態も、ただ単純に自律神経機能障害による、生物学的なものだけではないだろう。心理学的には、頸筋の緊張やこりが原因で、気ばかり焦って行動が思うようにならなくなり、生き生きと反応する力を失い不安や焦燥が起こってきて大きな負荷を受け、反応性に抑うつ状態になる可能性もある。一般には追い詰められると「首が回らない」と表現するが、これは精神状態と頸筋の緊張が密接に関係していることを示している。「頸部治療」は、精神医学の領域でも精神と身体の関係について新しい展望を開く可能性がある。

機能的に首は頭と胴体のインターフェイスであるので、頸筋にはその両方をうまく調和させる働きがあると考えられる。頸筋の障害はたとえ身体空間の一部しか占拠していても、ひとつの時期、ひとつの存在の相を表現している。したがって、あらゆる器官を統合している機能的サイクルのさまざまなレベルを変化させる可能性がある。

さて、この論文では、ストレートネックと不定愁訴のあった患者が、頸部治療によりストレートネックが治癒するとともに不定愁訴が消失したという症例が呈示されている。これは、解剖学的な変化の所見と不定愁訴の密接な関連を示す貴重な症例である。この論文は、松井の頸性神経筋症候群についての理論的裏づけのひとつである。今後、さらなる症例の積み重ねが期待される。

藤元 登四郎（一般社団法人藤元メディカルシステム
精神科）

最近では一般的にも良く使用されているストレートネックという用語は、用語のみが独り歩きをしており、その臨床的意義については殆ど何もわかっていなかった。本報告は、後頸部の筋に対する局所治療によってストレートネックが消失し、正常な頸椎前弯が出現すると同時に、様々な臨床症状も消失したという事実を示しており、その意義は

大きい。このことは、ストレートネックという状態が、頸椎の形態学的な異常ではなく、後頸部の筋の異常な緊張状態によって生じる機能的な異常であることを示すと同時に、この症例が示したような様々な症状が、そのような後

頸部の筋緊張亢進によって引き起こされることを示している。その意味で、本論文の著者らが提唱するストレートサインという用語は、より適切であると思う。

岩田 誠 (メディカルクリニック柿の木坂)